

(様式1)

ながのまちづくり活動公開審査申込書

申込年月日	平成25年2月4日	受付番号	14
活動部門・コース	1 企画・研究部門	2 実践活動部門	① ホップコース(スタート枠) ② <u>ホップコース</u> ③ ステップコース ④ ジャンプコース
団体の名称	(フリガナ) チョウマノカイ ちょうまの会		
団体の所在地			
代表者	(フリガナ) フルヤマナオキ 氏名 古山 直樹		
連絡先 (連絡責任者)			
団体の設立年月日	平成23年11月22日		
団体の 設立目的	長野市食と農の環づくりリーダー養成講座の受講者などが構成する食農教育活動を志す仲間の会。善光寺平の自然風土や歴史によって築かれ伝承されてきた食文化の調査研究を行い、指導資料として「食こよみ」を作成し、伝承活動を行う。さらに食農教育活動をすすめる仲間づくりを行う。		

<p>団体の活動実績</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、平成24年4月、ながのまちづくり活動補助金（企画・研究部門）獲得 2、同年5月総会開催、会員を5名から11名に増強 3、同年6月、堀内寿郎先生と三田コト先生によるこよみと年中行事、食文化論の講座を2回にわたり受講 4、毎月1回の定例会合を10回開催(24/5月～25/1月) 5、各地域での聞き取り調査(5地区を2名ずつで調査 24/6月～24/9月) 6、伝統食講習会6回開催。(会員が相互に講師を務め、一般市民も参加) (おやき 笹寿司 みそ 納豆 柏もち 干し野菜など) 7、平成24年度長野市食の文化祭に参加(お焼き、やしょうま出展) 8、平成24年11月、FM善光寺市政番組に出演 (ちょうまの会の活動の意義、調査結果の概要などをPR) 9、平成25年1月 こよみに使用する食の写真の試作と撮影 10、同年2月フェスタもんぷらで、やしょうまの親子教室開催
<p>構成員（会員）数</p>	<p>11名</p>
<p>応募する活動のタイトル</p>	<p>善光寺平の「食のこよみ」を軸にした、食と農の教育</p>
<p>応募する活動の目的及び達成目標</p>	<p>●現在の地域や社会の問題・課題と応募する活動の目的</p> <p>近年我々が口にするたべものは、自分たちや地域がつくった郷土のものでなく、ヒトが作ったものや遠くのものをお金をはらって買うことが当たり前の習慣になってきています。農業を生活の中心にしていた頃郷土にあった食の知恵や健康維持の秘訣、食べものはいのちそのものという実感、自然や神への感謝の気持ちなどはだんだんうすれ、腹を満たす、享楽を得るだけのモノになってきています。</p> <p>そしてその反動が、原因不明の病の横行、体力の低下、こころの不安定などの状況を招いている大きな原因であるといわれています。</p> <p>郷土の高度成長期以前の食や農の習慣を聞き取り調査しているうち、こういった状況を打開できるヒントが身近に沢山あることがわかりました。調査で学んだたくさんの財産を今度は我々が地域に伝承し、解決の一助にしたいという使命感が生まれ、まずはこれらの知恵や習慣を網羅した郷土の「食ごよみ」をつくらうという思いが鮮明になっています。</p> <p>都市と地域の格差や核家族化がますます進んでいる状況下で、いまや家族間ではなかなか難しい郷土のすぐれた食文化や歴史の伝承を「食ごよみ」を中心に地域全体ですすめ、健全で明るい未来づくりに役立てたいというのが活動の目的です。</p> <p>●応募年度の達成目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、善光寺平を5地域に別けて聞き取り調査した行事や行事食を網羅した「食ごよみ」をつくり、伝承の教材とする。 2、教材を使い、地域で生活する若者や子供たちに郷土の物語や実習をふまえながら伝承できる人材を、複数育てる。

応募する活動の 具体的内容	<p>※実施項目、場所、対象者など</p> <p>①善光寺平の食ごよみ[添付サンプル参照]の編集と制作</p> <p>1、 体裁はA4版オールカラー 16～24 ページ 中綴じ。見開き2ページごとに1か月分の内容を掲載。月ごとの行事と行事食を写真やイラスト、コピーなどで解説する。全12か月。 永久保存版ではあるが、いつでもどこでも手軽に使いたいので装丁を工夫する。</p> <p>2、 対象は、子育て世代の親子。(お婆ちゃんの体験を子⇒孫へ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・善光寺平の四季や種まき・収穫のようす、行事や段取りについて、楽しくわかりやすく紹介する。 ・こよみを参考にして、親子で楽しみながら容易に「かたり」「つくる」ことができるように構成を工夫する。 ・お婆ちゃんやおじいちゃんの知恵や教訓がいまと将来に生かされるような「ヒント」「エピソード」を豊富に盛り込む。 ・できればカレンダーの要素を取り込んだりメモ欄を設けるなど、実用的なものに仕上げる。 <p>②伝承活動を行うリーダーの育成</p> <p>1、 かたり部研修</p> <p>2、 行事食・伝統食の料理研修</p> <p>③研修終了後の実践活動</p> <p>1、 伝統食・行事食の発表と試食会の開催 (H26年1月「ぜんこうじ平の食の集い(仮)」)</p> <p>2、 各地域での伝承活動「親子料理教室」(豊野・徳間地区25名程度)</p>			
	年 間 計 画		編集と制作会議	リーダー養成実践講座
			かたり部研修	料理研修
4月		月2回	善光寺平の行事と食の 関連・その意義	
5月		月2回		柏餅、黄粉むすび
6月		月2回	日本人のしきたり	
7月		月2回		お盆のお焼き
8月		月2回	先進事例視察研修	
9月		月2回		お彼岸の団子・おはぎ
10月		月2回	食への感謝といのり	
11月	月2回		一汁三菜、 ひらがな料理	

	12月	月2回	家族の食生活管理	
	1月	「ぜんこうじ平の食の集い(仮)」伝統食・行事食の発表と試食会 (長野市の食の文化祭への参加)		
	2月	第1回「親子料理教室」(報告と反省会)		
	3月	第2回「親子料理教室」(報告と反省会)		
活動することで期待される地域や社会への具体的な効果・成果 ※「公益性」の視点	<p>①活動目的の再確認 形式的には地域の食文化を発掘し、伝承するためのツールとして「食こよみ」をつくる活動だが、活動の成果はこよみが完成したあとの伝承や普及活動が地域により影響をどのくらい及ぼしたかで評価されると考える。</p> <p>②活動の意義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や家族間では難しくなっている郷土の食文化や歴史の伝承を、地域ごとのリーダーが受け持つことによって、万遍なく、持続的に行うことが可能になる。 ・郷土の伝統的な食ベゴト(=一汁三菜ひらがな料理)が食生活の中心になっていくことで、環境汚染や病気に負けない強い体が作れる。 ・たべものを共に作り、ともに食べる機会を提供することによって地域での子育ての再構築が進む。 ・食べものをつくり出す自然や先人の遺産に感謝し、しぜんに頭を下げる習慣ができる。(人智を超えた神の存在を感じる畏敬のこころ) ・これらの実践を通じ、地域の若者や子供たちが郷土への愛・感謝・誇りといった、こころの醸成がすすむ 			
活動を継続するための取り組み(資金面、人材等) ※「自立性」の視点	<p><取り組みの姿勢></p> <p>① 誰もが加わりたい、やってみたいと思うような魅力のある伝承活動を展開する。</p> <p>② 集まった人たちがおカネを払ってでも聞きたい、体験してみたい講座・体験教室を四季を通じて用意する。</p> <p>ことにより会員の安定確保と、参加者の増大、他の組織や市民団体の賛同と協力を得る。</p> <p><主な資金源></p> <ol style="list-style-type: none"> 1、会員の会費 2、教材や郷土食・行事食の販売収益 3、イベントの参加者から得る参加費 4、オリジナルな加工食品や収穫物の販売収益 			
翌年度以降の活動内容の概要	<p>翌年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、食こよみの増刷、食文化伝承活動 2、リーダーのためのスライド、ガイドブックなどの制作 3、会員の拡大・増強のためのPR活動 4、伝統食に根ざした食品・調味料の開発・製造・頒布 5、飲食施設・販売施設の開設の準備(上田市の「コラボ食堂」などへのトライアル出店を含む) 			

	<p>翌々年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、引き続き食文化伝承活動をしながら、地域を超えた「伝統食文化研究会（仮称）」の基盤づくりをする。 2、法人・協同組合、関連市民団体などとも調整をはかり、食文化の伝承をさまざまな角度で展開する。 3、常設の郷土食レストラン、販売コーナーの営業を開始する。 4、3を拠点にして、郷土食・行事食を普及する様々なイベントを展開する 5、行政と連携し、郷土の食文化とりわけ「一汁三菜ひらがな料理」が、当たり前前の日常食として家庭や学校給食に根付く運動をすすめる。 ひらがな料理 みそ汁とか焼き魚など、カタカナやローマ字の洋食ではない和食料理をいいます。地元でとれた食材を使って作ることを基本にします。
<p>事業の 最終目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、食会員の確保と組織の拡大、他の仲間の会と伝統食文化研究会(仮)の発足 2、医療費の低下と、健康寿命の維持(アンチ・エイジング) 3、楽しくて生きがいもてる郷土の生活環境づくり 4、地域内自給自足を進めることによる、離農や、過疎地の解消 5、内外ともに、日本一健康で長生きのできる地域という定評

必要経費

(単位 円)

科 目	金 額	
謝金・賃金	80,000	
旅費交通費	20,000	
消耗品費	75,000	
印刷製本費	600,000	
広告宣伝費		
通信運搬費	10,000	
使用料	26,000	
備品購入費		
合 計	A 811,000 円	

自己資金

名 目	金 額	
会費	60,000	
寄附金・協賛金		
参加者負担金	25,000	
事業収益金	78,000	
合 計	B 163,000 円	

<p>補 助 金 要 望 額 (C)</p>	<p>$C = A - B$</p> <p style="text-align: center;">648 千円 (千円未満切り捨て)</p>
<p>※補助割合・限度額</p> <p>【企画研究部門】 Aの金額以下、ただし10万円以内</p> <p>【実践活動部門】 (スタート枠) $A \times 0.8$ の金額以下、ただし50万円以内 (ホップ) $A \times 0.8$ の金額以下、ただし100万円以内 (ステップ) $A \times 0.6$ の金額以下、ただし60万円以内 (ジャンプ) $A \times 0.4$ の金額以下、ただし40万円以内</p>	